

【論文8】

摩訶迦葉 (*Mahākassapa*) の研究

森 章司

本澤綱夫

【0】はじめに

[1] われわれはこの「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」なる総合研究において、原始仏教聖典を材料として釈尊の生涯と釈尊教団形成の歴史を再構築することを目指している。しかし実際のところは、釈尊の生涯は釈尊教団の形成史と重なるので両者は2つではない。そして釈尊の生涯と教団の形成史はそのまま釈尊と弟子たちの交流の歴史といえることができる。したがって釈尊の生涯は弟子たちの生涯と密接な係わり合いを持っている。逆の面から言えば、弟子たちの生涯を描くことは、釈尊の生涯の一端を描くことになるわけである。

釈尊は成道後の45年間を専ら衆生教化に尽くされ、その足跡の及ぶ仏教中国の各地で順次仏弟子(出家・在家)たちが帰依していった。これらの仏弟子たちの中でも、教団内の優れた活動によって大きな影響力を持った有力な弟子たちは、四大声聞<sup>(1)</sup>・十大弟子<sup>(2)</sup>などとして後世にまで語り継がれている。その中の一人がここに取り上げる「摩訶迦葉 (P:Mahākassapa、Skt:Mahākāśyapa)」である。

釈尊の成道直後の教化活動の一端は「律蔵」の「受戒鍵度(『パーリ律』では *Mahā-khandhaka*)」に見ることができるが、そこには摩訶迦葉は登場しない。しかし『涅槃経 (*Mahāparinibbāna-suttanta*)』や律蔵の「五百結集鍵度 (*Pañcasatikakkhandhaka*)」に見られるように、摩訶迦葉は釈尊の葬儀に際しては欠くべからざる役割を果たし、その直後の第一結集においては主催者的な役割を果たしたのであるから、釈尊教団の中ではもっとも重要な地位にあったものと考えられる。また釈尊が半座を分かたれ、自身の衣を交換されたというような、舍利弗や目連に勝るとも劣らないエピソードを有している。それにもかかわらず、意外に摩訶迦葉の伝記の詳細は知られない。摩訶迦葉は『十誦律』によれば「自誓受戒」という彼しか例のない具足戒の受け方で釈尊の弟子となったとされるように、彼が釈尊の弟子となった因縁は謎に包まれている。これを解明することは、釈尊教団の形成史を知るための大きな鍵ともなるはずである。これが仏弟子研究の手始めとして「摩訶迦葉」をとりあげることにした所以である。

- (1) 「四大声聞」あるいは「四大弟子」の用例には次のようなものがある。A文献(A文献・B文献が何を意味するかについては【1】に述べる)としては、四大声聞の尊者大目犍連・尊者迦葉・尊者阿那律・尊者賓頭盧:『増一阿含』028-001(大正02 p.647上)、大迦葉比丘・君屠鉢漢比丘・賓頭盧比丘・羅云比丘の四大聲聞:『増一阿含』048-003(大正02 p.789上)、四大声聞の迦葉・目連・阿那律・賓頭盧:『五分律』「雑法」(大正22 p.170上)、四大弟子の大迦葉・舍利弗・目連・阿那律:『十誦律』「波夜提030・食尼讀歎食戒」(大正23 p.085中)がある。なお次のものは恐らく舍利弗・目連の入滅後のことで2人は含まれていない。4人の大長老(*catvāro mahāsthavirā*)としてアージュニヤタ・カウンディニヤ(*Ājñātakaundīnya*)、マハー・チュンダ(*Mahācunda*)、ダシャバラ・

カーシャパ (Daśabalakāśyapa)、摩訶迦葉 (Mahākāśyapa) が挙げられる: *Mahāpari-nirvāṇasūtra* p.420。

B 文献としては四大耆宿聲聞の具壽阿若橋陳如と具壽難陀と具壽十力迦攝波と具壽摩訶迦葉: 『根本有部律』「雜事」(大正 24 p.401 中)、摩訶迦葉・賓頭盧・君徒般歎・羅睺羅の四大比丘: 『舍利弗問經』(大正 24 p.902 上) がある。

その他に大乘經論あるいは中国撰述の文献には、摩訶迦葉を四大弟子中為大とする: 『妙法蓮華經文句』(大正 34 p.010 下)、四大聲聞の大迦葉比丘・屠鉢歎比丘・賓頭盧比丘・羅云比丘: 『仏説弥勒下生經』(大正 14 p.422 中)、四大聲聞の一人として迦葉を挙げる: 『仏祖統紀』(大正 49 p.327 中) といったものがある。

ここから知られるように「四大聲聞」あるいは「四大弟子」のメンバーは一定しているわけではないが、その中に摩訶迦葉は常に含まれる。

- (2) 「十大弟子」の用例には次のようなものがある。ただし A 文献・B 文献の中には見いだされない。したがってこれは原始仏教ないしはその系統による仏弟子のまとめ方ではないということになる。大乘經論・中国撰述文献の中に次のようなものが見いだされる。十大弟子として舍利弗智慧・目犍連神通・大迦葉頭陀・阿那律天眼・須菩提解空・富樓那說法・迦旃延論義・優波離持律・羅睺羅密行・阿難陀多聞: 宋法雲『翻譯名義集』(大正 54 p.1063 上)、十大弟子として舍利弗・大目犍連・大迦葉・須菩提・富樓那・阿那律・迦旃延・優波離・羅睺羅・阿難: 『仏説灌頂經』(大正 21 p.517 下)、十大弟子各有一能皆稱第一。即迦葉頭陀・阿難多聞・舍利弗智慧・目連神通・羅睺羅密行・阿那律天眼・富樓那說法・迦旃延論義・優波離持律・須菩提解空: 宋・子璿録『金剛經纂要刊定記』(大正 33 p.207 中)、十大弟子として舍利弗・摩訶目連・摩訶迦葉・離波多・須菩提・阿泥嚧豆・難陀・金毘羅・迦旃延・富樓那彌多羅尼子: 唐法藏『華嚴經探玄記』(大正 35 p.445 下) などがある。『望月仏教大辭典』(p.2294 下) によれば、これらは舍利弗・大目犍連・大迦葉・須菩提・富樓那彌多羅尼子・摩訶迦旃延・阿那律・優波離・羅睺羅・阿難の 10 人を挙げる『維摩詰所説經』(大正 14 p.539 下) によるのではないかという。

また同辞典によれば十大弟子をモチーフとして製作された形像は多いという。日本では最近文化功労賞を受けられた彫刻家の中村晋也氏の釈迦十大弟子像の写実的な造形は見事である。氏は『釈迦と十人の弟子たち』(河出書房新社 2003 年 3 月 30 日) を出版されたことからわかるように、困難な条件のもと綿密な考証をされたうえで製作された。本研究がこれに間にあわずお役に立てなかったことを残念に思うものである。

[2] ‘Mahākassapa’ という名前は後に詳しく考察するように ‘Kassapa’ という姓から来たものであり、これは「迦葉」「迦提波」などと音写され、「亀氏」「飲光」と意識される。また ‘mahā’ は「大」の意であって「摩訶」と音写される。これは当時のインドには ‘Kassapa’ という姓が多く、そこで他の ‘Kassapa’ と区別するために尊敬をもって呼ばれたものである。本稿では「摩訶迦葉」という呼び方を用いることにするが、漢文文献の引用に際しては元の呼称をそのまま用いる。用語に不統一があるのはそのためであることを了解されたい。

またその妻は ‘Bhaddākapilāni’ (バッダー・カピラーニー。あるいは ‘Bhaddākāpilāni’ バッダー・カーピラーニー) で、婆陀あるいは跋陀羅迦卑梨耶と音写され、妙賢と意識される。本稿ではバッダーと表記する。しかし漢文文献の引用に際して例外のあることは、摩訶迦葉と同様である。

なお本稿は地の文では常用漢字を使っているが、引用文では SAT (大藏經テキストデータ

ベース研究会『大正新脩大藏經テキストデータベース』) などの電子テキストを活用させていただいており、そこでは正字が使われている。本来はいずれかに統一すべきであるが、本モノグラフは版下作成の段階まで、すべて著者自身の手によって行っており、とてもそこまで手が回らなかったのが混用されたままになっている。この不備についてはぜひともお見逃し願いたい。